

論文の要旨

論文題目 物語の欲望—近代アメリカ小説の
クィア・リーディング
氏名 谷本 千雅子
学位 博士 (文学)
授与年月日 平成 19 年 12 月 28 日

本論文は、文学研究の分野に取り入れられた「物語」に関する理論と、セクシュアリティに関する研究に基盤をおいたクィア理論とを組み合わせた学際的な読みの可能性として、クィア・リーディングを行ったものである。文学作品に描かれたセクシュアリティを読み解くために、従来までは、作者の隠された同性愛の欲望を見つけ出すようなイン/アウトのモデルが用いられることが比較的多かった。つまり、このモデルの読みは、作者や登場人物の隠された同性愛的欲望をクローゼットの外に引き出す—アウトする—ものであるが、しかし、その作業は、フーコーによって批判される「知への欲望」によって、性的なものを「真実」と読み換えるイデオロギーに支配されている。また性的欲望を同性愛・異性愛という二項対立の中に押し込めてしまうものでもある。

本論文は、作者や作品をクローゼットからアウトするのではなく、クローゼットそのものがどのようにして形成されホモセクシュアルな身体がどのように可視化されるかを見ていくものである。そして、その切り口として、「語り」の構造に焦点が当てられている。文学に描かれた物語世界だけに注目し分析するのではなく、「語り」の構造に踏み込んで分析することで、イン/アウトのモデルがクローゼット形成の一端を担っていることを明らかにしている。

セクシュアリティについて「書く」という行為は、それ自体がセクシュアリティの言説を生み出し、セクシュアリティの領域を押し広げる。そして物語であれ、告白の儀式であれ、ひとの噂話であれ、セクシュアリティに関してなにかを語ることは、同様の効果を持っている。本論文は、セクシュアリティの言説が生み出されるときに浮かび上がる政治性を浮き彫りにするために、ヘンリー・ジェイムズ、ウィラ・キャザー、アーネスト・ヘミングウェイという近代アメリカ文学を代表する作家のテキストを、セクシュアリティの言説として捉え、それぞれにセクシュアリティがどのように刻印されているかを論じている。ジェイムズは、ホモフォビックな語り手を創造して、語りえぬ同性愛を秘密として描き出し、読者の恐怖を喚起したし、キャザーはジェンダーの越境とセクシュアリティの越境が欲望を介して交錯する地点を、創作活動を通じて探ろうとした。

そして、ヘミングウェイは、身体描写と語りの視点を組み合わせることによってホモセクシュアルな身体が知覚される過程を浮き彫りにした。彼／彼女らの文学的なテキストは、確かにセクシュアリティに関連して欲望を描き、身体を描き、読者の欲望を喚起している。本論文は、しかし、それらの欲望に向き合いながら、それについて異性愛的であるとか同性愛的であるとかという議論をするのではなく、むしろ、作品の中で特定の性愛行動や特定の欲望を、異性愛的あるいは同性愛的であると決定付けている要因が何であるかを探っている。

もし文学作品の中で同性愛者の存在や同性愛的欲望が読み取られるとしたら、誰が、どのようにしてそれを読み取るのか。同性愛というアイデンティティは、作品においてどのようにして構築されていくのか。そうしたことを見ていくことが、本論文で試みられたクィア・リーディングの手法である。本論文でのクィア・リーディングは、それゆえ、単に作者の同性愛的傾向を指摘したり作品中に隠れている同性愛者や同性愛的欲望を探し当てたりするようなイン／アウトの読みから、根本的に区別されるべきものである。つまりそれは、第一に、ホモフォビアを排除した読みであり、そして第二に、同性愛とか異性愛とかというような二分化されたセクシュアル・アイデンティティのあり方に対して異議申し立てをするような読みであるといえよう。

本論文は、クィア・リーディングのための方法論を提示した序章と、具体的なテキストについて序章での議論を踏まえてクィア・リーディングを行った 9 つの章で構成されている。まず序章「物語の欲望とクィア・リーディング」では、上記のようなクィア・リーディングの方法論を提示しながら、それにもかかわらず作品内の同性愛的な欲望をアウトするような読みを、物語が読者に対して出す「わたしの欲望を読め」という命令に従うものとして捉えている。この命令が「正しい意味を読め」という要請へと変換されていく過程を、エディプス的な欲望と関連付けながら論じていくことにより、エディプス物語において、物語という形態が欲望を産出する装置であることを示唆した。そのうえで、セクシュアリティについて書かれたテキストの構造を探ることによって、それが読者にもたらす効果を記述することの重要性を解き明かしている。

第1章「密林の野獣なんかこわくない？」は、ジェイムズの「密林の野獣」について論じた章である。この作品は、男性登場人物マーチャーの中に芽生えた危険なホモセクシュアルな欲望に対する恐怖を描いた短編であり、イヴ・コゾフスキー・セジウィックやカジャ・シルヴァマンらが、エディプス・コンプレックスの理論を当てはめながらこの作品の解釈を行っている。この章では、ホモセクシュアルな欲望が、作品にどのように描かれ、読者にどのように解釈されるかを、セジウィックやシルヴァマンと同じく、エディプス・コンプレックスの理論に関連させながら論じた。この物語の中で、語り手は、マーチャーの欲望を彼の「秘密」として提示し、その秘密に対する読者の恐怖をあおっている。秘密を最も恐れているのは誰なのか？この答えはテキストのなかには書かれておらず、解釈において浮上してくるのである。

第2章「このテキストにレズビアンはいますか？」では、19世紀後半にボストンで流行していた女性同士のボストン・マリッジの裏に潜む女性の同性愛を扱ったジェイムズ作品『ボストンの人びと』を取り上げた。作品に登場するオリーブ・チャンセラーは、本当にレズビアンなのだろうか？彼女をレズビアンであるとみなすのは、誰の欲望によってだろうか？これらの問いは、セクシュアリティをめぐる語りと解釈に関わる問いである。この章では、ジェイムズ作品の読解を通じて、作品を読むという行為に潜む欲望の所在を明らかにした。オリーブが同性愛者になるのは、語り手の同性愛嫌悪的なテキストにおいてのみである。それゆえテキストは同性愛についてのものではなく、むしろ、同性愛嫌悪的な色付けをされたテキストだといえるだろう。

第3章「ウィリアム・キャザー・Jr.の不安」では、キャザーの作品におけるジェンダーの越境とセクシュアリティの越境の関係について「オーサーシップの不安」と関連させて論じた。彼女の伝記的事実をたどれば、キャザーは男性になりたい女性であった。つまり、フロイトのモデルを使えば、男性という性に自己同一化し、女性という性に対して欲望を抱くのである。このモデルの場合、ジェンダーの越境がつまりはセクシュアリティの越境の要因となっていると考えられる。しかし、作品を読む限りにおいて、キャザーはジェンダーの越境によって肉体の壁を乗り越えることも、性的欲望を直接的に表現することも、ほとんどできていないように思える。この章では、ジェンダー的越境の不可能性が、『わたしのアントニア』をはじめとするキャザーの語り全般において、いかに性における不可能性の要因となり、セクシュアリティを抑圧しているかを考察し、「レズビアン」としての作者の欲望とそれに対する不安が「オーサーシップの不安」と深く結びついていることを解き明かした。

第4章「ポールの快樂の場合」では、キャザーの短編「ポールの場合」の作品解釈を行った。この短編は父と息子の関係を主題にした作品である。主人公によるジェンダーとセクシュアリティの越境が中心に論じられることの多いこの作品に関して、本論文は、ポールの越境を、エディプス・コンプレックスの問題と結びつけて扱った。この短編を同性愛の物語としてアウトする読みの期待に反して、しかし、このテキストには同性愛的な欲望は固定されたそれとして描写されてはいない。この作品においては、父の欲望と父への欲望との分かちがたさがポールの倒錯を特徴付けている。それは、父と息子のエディプス的な共犯関係の失敗によってもたらされた倒錯的な快樂であると考えてよいだろう。

第5章「だれが不倶戴天の敵なのか？」では、女性の語り手を有したキャザーの作品『わたしの不倶戴天の敵』の解釈を、語りの問題を中心に行った。語り手にネリーという若い女性を設定したキャザーの野心は、むしろ彼女の「オーサーシップの不安」と強く結びついている。そしてネリーの語りは、女性であることにジレンマを感じ、分裂をさらけ出し、うまく判断ができない。それはネリーが、「父の法」に従えという命令を受け入れることによって女性ジェンダーに自己同一化し、男性の欲望の対象となること

を目標とするような異性愛の呪縛に身をゆだねたことを示している。この呪縛は、ネリーのなかにホモフォビアを芽生えさせ、性的であるか否かに関わらず、女同士の親密な関係から彼女を遠ざけてしまうことになる。それは、おそらく、レズビアン的な欲望を持っていたといわれるキャザー自身のなかに、ホモフォビアがあったからにはほかならない。『わたしのアントニア』の語り手ジム・バーデンが、キャザーのレズビアン的な欲望を意図的に隠すマスクであるとするならば、ネリーは、キャザー自身のホモフォビアを無意識的に映し出す媒体として機能しているといえるだろう。

第6章「ヘミングウェイをクィアする」では、ヘミングウェイ作品に対してクィア・リーディングを行うことの意義について論じた。長年の間、批評家たちによって構築されてきた男性的異性愛のアイコンとしてのヘミングウェイ像に、どのような切り口で迫っていくべきかを考えるための糸口として、「オカマ野郎の母親」と「世の光」の二作品を取り上げ、そこでどのようなセクシュアリティが語られているかではなく、セクシュアリティがどのように語られているかに注目することの必要性を示唆した。

第7章「ヘミングウェイとレズビアンたち」は、「エリオット夫妻」についての作品解釈である。この作品は竹村和子が提示する「正しいセクシュアリティ」の行為に励む夫婦の姿を滑稽に描くことで、「正しいセクシュアリティ」の詳細がいかに空洞化されているかを表現した作品である。T. S. エリオットを揶揄したとされるこの作品において、「正しくない」セクシュアリティであるレズビアニズムがどのように描かれているかを探ると同時に、ヘミングウェイのセクシュアリティ観を考察した。

第8章「ホモセクシュアルな身体の出現」では同性愛を扱ったヘミングウェイのテキストのうち「簡単な質問」、『午後の死』と「海の変容」をとりあげ、フーコーが批判する「知への意思」がこれらの作品においてどのように機能し、作品のなかに描かれる欲望を、ホモセクシュアルなものとはセクシュアルなものに、どのように差異化していくのかを検証した。これらの作品において、ホモセクシュアルな身体は、身体に刻印されたジェンダーの越境が、他の登場人物によって確認されるときに初めて可視化される。周囲の人物たちの「知への意思」が、ホモセクシュアルな身体を知の対象とし、その主体性を消し去り、恐怖の源となっていく過程を考察した。

第9章「エデンの園」では、ヘミングウェイのアフリカ化の欲望について論じた。原稿「エデンの園」では、断髪や性役割交換などのジェンダーとセクシュアリティに関する主題が、日焼けによって肌を黒くすることでもたらされる登場人物のアフリカ化の主題と交錯しながら提示されている。このことによってヘミングウェイの登場人物のアフリカ化する欲望をアウトすることはたやすい。しかし、そこで読み取るべきことは、むしろ彼らのアフリカ化への欲望が、アフリカ人たちの声を聞くという作業には決して向けられないということである。これはヘミングウェイが、結局のところ、西洋中心の価値観にインされていることを示している。ヘミングウェイのアフリカ化への欲望をアウトする批評を通じて、彼をインする白人中心主義的文化を読み解くという作業は、ヘミ

ングウェイのセクシュアリティについての考察にも応用可能である。つまり、ヘミングウェイの正統でないあらゆる欲望をアウトする批評は、ヘミングウェイをインしているものにこそ向けられるべきなのである。